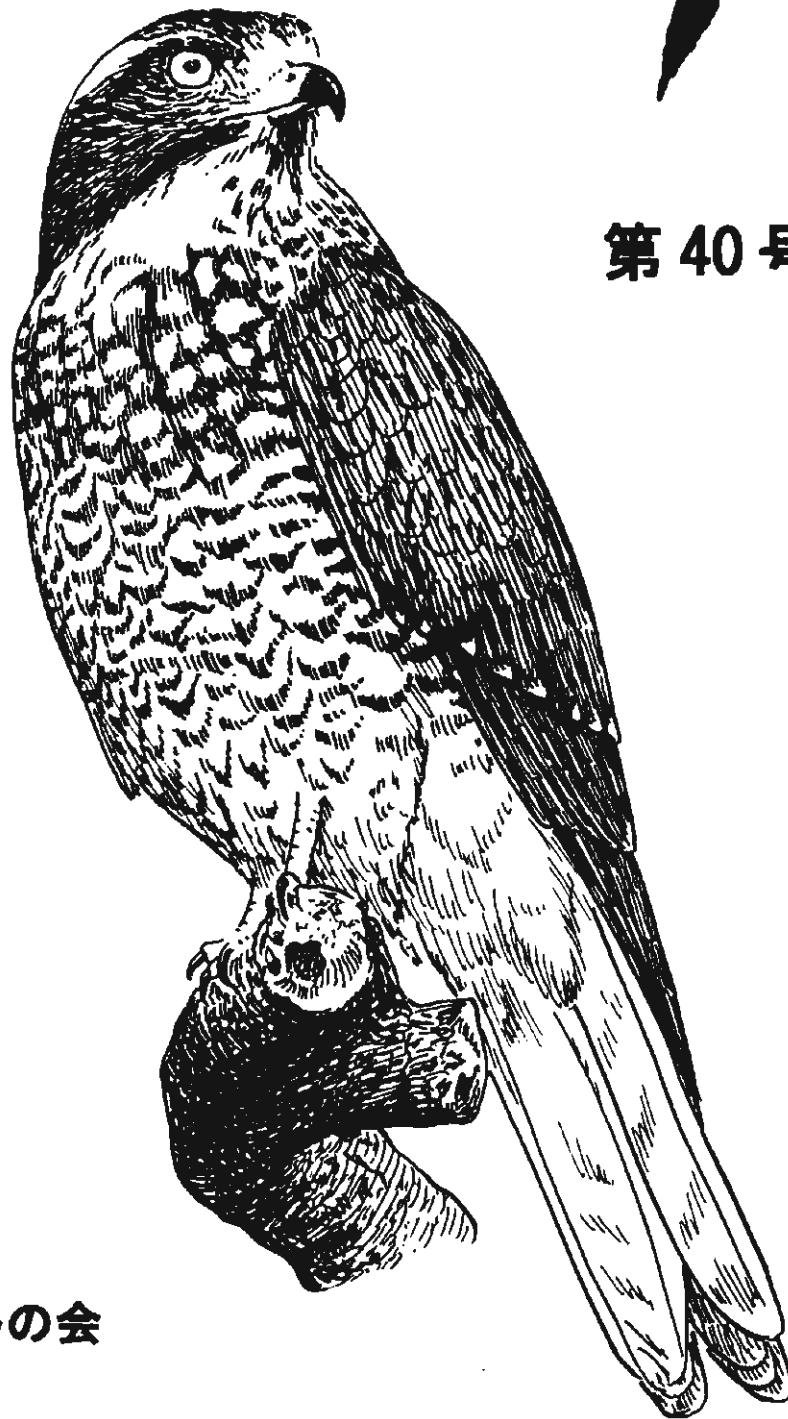


しごこ

第40号



2003年9月
(財)日本野鳥の会
三重県支部



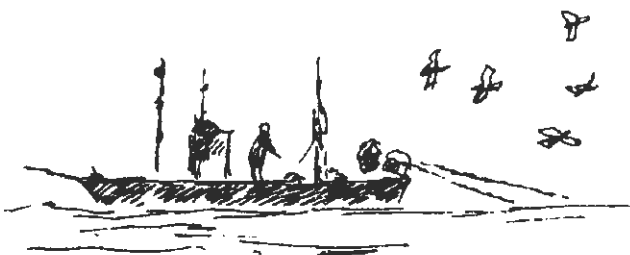
第40号発刊に寄せて

支部長 杉浦邦彦

三重県中勢部以南の伊勢湾一帯でハシボソミズナギドリの斃死体(2400羽以上)が発見され、様々な憶測が出ました。30年程前にも同じことがあり、紀伊半島から関東の太平洋沿岸の広範囲に亘って今回以上の犠牲があったことはまだ記憶に新しい。当時は日本経済の高度成長期で公害被害の時代でした。死因は不明でその後、日本とオーストラリアの鳥学者が協同研究した結果、彼等はタスマニア諸島で繁殖、その後親鳥は巣立ち前の雛を巣穴に残し、オキアミの採食をしに一時南極海に移動し皮下脂肪を蓄え(オキアミ発生の増減は渡りの成功率に影響を与える。)北上し、赤道を通過して日本列島の遙か東洋上を抜け(一時休息することがある。)アリューシャン列島に到着し8月頃まで滞在してオキアミによる皮下脂肪を再び蓄え、北米大陸の西洋上を南下してタスマニア諸島に戻る大旅行家です。この時、親鳥群団と若鳥群団の違いは、若鳥群団が日本列島の海岸部をコースにすることです。ここは地球規模による深層水と熱水の湧昇地域が志摩や伊豆半島の沖

に噴出し、オキアミ類の発生があることです。彼等は、餌の補給をここで行うようだが、北東貿易風の微妙な変化で前線や低気圧の発生の強弱によって巻き込まれることもあります。

「バカの壁」養老孟司著に出会い $y=ax$ と一次式に興味が沸きました。脳内の a という係数が如何に大切なことなのか、 a は大別してマイナス、0、プラスに区分され、0以外は無限大となります。0は出力がなく行動に影響がなく、マイナスがプラスになると紙一重、せめてプラスの運動になるようにしたいものです。第40号が発刊できたことは会員の方々や a の係数がプラス指向のお陰だと私はいつも感謝しています。さらに発展させるために今回の事件を機会にネットワークの成長を期待するところです。



今月の表紙： ペン画 田中豊成

目次

巻頭エッセイ・今月の表紙	2
特集：タカの渡り	3
会員のページ	10
連載：ボーボー日記	14
調査・研究のページ	15
支部活動のページ	20
探鳥会報告	24
編集後記	26

今月の表紙

サシバ

伊賀でもサシバは山間部で棲息しています。はるか南の国からやってきて子育てをしますが、営巣地がだんだん無くなりつつあります。しかも山間部の田んぼは放置されがちで、サシバの餌になるカエル等が減少しているのも気になります。秋のサシバの渡りでは数が年々減少しているのが実状です。昔に戻るのは無理でも、今ある自然を大切にしてサシバや他の野鳥たちが繁栄するのを願っています。

田中豊成(名張市)



特集：タカの渡りによせて

編集部 平井正志

伊良湖岬の山から夜明けと共に舞い上がり、頭上を通過し、海を渡っていくサシバは自然の壮大なドラマです。以前から渡りのルートとして有名であった、伊良湖岬、大隅半島、宮古島の他にも近年、長野、岐阜を通過する内陸のルートが解明されつつあります。またサシバ以外の渡りについても、ハチクマの多くがサシバより早く9月下旬に渡ること、ノスリが北海道から本州へ大量に渡ること、さらにアカハラダカが朝鮮半島から九州、琉球列島を通過することが明らかになるなどタカの渡りについて様々な事実が近年明らかになっています。

今回はタカの渡りを特集しました。三重では伊勢地方の渡りを吉居さんに執筆していただきました。さらに岐阜県と愛知県の方にそれぞれの渡りをまとめていただき、中部地方の渡り全体が把握できるように計画しました。

さらに秋田さんには神島での渡りの様子を書いて頂きました。

サシバとは

タカの渡りの主役、サシバは東アジアで繁殖し、東南アジアで越冬します。日本では本州、四国、九州で繁殖しますが、繁殖は関東以西が多く、東北ではあまり見られません。また長野県でもあまり多くありません。沖縄南部では越冬する個体もあります。大きさはハシボソガラスくらいですが、翼は長く、飛ぶ姿はほぼ大きさが似ているハシボソガラス、オオタカ、ノスリに比べほっそりと見えます。背の色は赤みのある茶色で、オオタカやノスリと色でも区別できます。3月下旬から4月上旬に低山の繁殖地に飛来し、4月下旬に産卵し、6月下旬には幼鳥が巣立ちします。幼鳥の胸は縦斑があり、横斑のある成鳥と区別できます。繁殖期にもピークと特徴のある声でよく鳴くのでタカの中ではよく発見できる種でしょう。三重県下でもかつては普通に見られましたが、数が減少しているようです。

餌は主にカエル類の両生類です。へび、大型の昆虫やムカデもよく捕食します。この点で、餌場を開けた場所、特に田や畔、草丈の低い草地に依

存することが多いと考えられます。一方林や高茎の草原では餌をとれません。かといって、広い水田地帯では巣を掛ける木の関係か、繁殖はほとんどみられません。ハシボソガラスなどと違って、孤立した立木や社の森などに巣をかけることも少ないようです。丘陵地に入り組んだ山あいの田を主な棲処としています。おそらく弥生時代以降の水田耕作の拡大と共に分布を広げたのでしょう。以前はよくアカマツに巣を掛けていましたが、アカマツが枯れた後はスギの木を選んでいようです。餌が動物食のものが殆どであり、その点、ウサギなど草食獣を捕食するイヌワシやクマタカよりも高次の捕食者といえ、生物多様性の重要な指標といつてよいでしょう。

サシバの餌と繁殖場所の変貌

水田でカエル類が減少しているという話がよく聞かれます。水田の水路が以前の素堀の溝からコンクリート水路に代わり、カエルの自由な往来が妨げられ、また乾田化して、落水すると水が全くなり、カエル類の棲息が難しくなっています。さらに三重県では稲作が早まり、オタマジャクシの時期には水が落とされ、カエルの繁殖サイクルが困難になっているようです。またカエルが捕食すべき様々な昆虫が減っているのかもしれませんが。カエルの減少はサシバの繁殖にかなり重要な意味をもつでしょう。

主な住処である山に入り込んだ田が耕作を放棄され、跡地にスギが植林されたり、草丈の高い草本が生育するとサシバのエサ場ではなくなります。巣を掛けるアカマツがなくなり、やむをえず、スギに巣をかけています。このまま推移するとサシバが絶滅危惧種に指定されることは確実です。



しろちどり 40号



伊良湖岬のタカの渡り

藤岡エリ子（伊良湖岬の渡り鳥を記録する会）

秋の伊良湖岬は、タカの渡りに魅せられた多くのバーダーで賑やかになります。

1羽見ただけで嬉しくなる猛禽類が、いろんな種類しかもたくさん見られるのですから、見に行かずにはいられない、伊良湖岬はそんな場所です。

1、サシバ

伊良湖岬でもっとも多く見られるのは、サシバと言う中型のタカです。毎年9月下旬から10月半ばにかけて、1万前後が南の越冬地へ渡っていきます。太平洋沿岸、関東周辺～静岡付近で繁殖するサシバが、伊良湖岬を通過していくのではないかとされていますが、まだ断片的なことしかわかっていません。また、伊良湖を通過した後、三重県を通過し奈良へ抜けるのではないかとされていますが、こちらはもっとよく分かっていません。頭上を過ぎていくサシバを眺めながら、想像の翼を広げて一緒に旅してみたいでしょう。

2、ハチクマ

サシバより大きなタカです。サシバと同じぐらいの時期に多く観察され、毎年5百羽前後が渡っていきます。不思議なことに伊良湖岬を通過するハチクマのほとんどは、今年生まれた幼鳥たちです。なぜか、ここでは成鳥になかなかお目にかかることができません。

3、ハイタカの仲間

ツミ、ハイタカ、オオタカ、それぞれ大きさは違いますが、姿のよく似たタカで、これぞタカだと一般の方が思われる姿をしています。伊良湖岬では、ツミが最も多く通過し、毎年千羽ぐらい観察できます。ツミは、サシバやハチクマのように一時に集中して渡ることはなく、渡りの期間は9月の終わりから11月半ばまで長く続きます。オオタカもツミと同じようにサシバやハチクマが渡る時期から観察でき、特に多いという時期はなく、平均して渡っていきます。一方、ハイタカは、渡りの時期が遅めで10月半ば頃から姿を見せはじめ、11月上旬に最も多くの個体が通過しています。少数のハイタカとオオタカは、渥美半島で越

冬しており、渡りはとぎれることなく厳冬期でも少数の移動が観察できます。

3、ノスリ

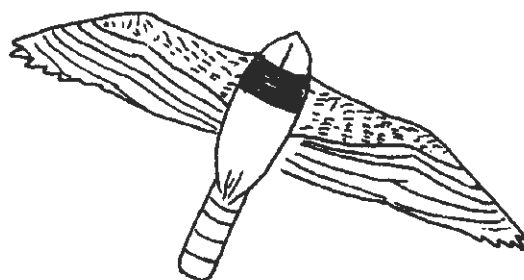
ノスリは、ツミと同じように渡りの観察できる期間が長いタカです。なかなか海を渡っては行かないで、古山と宮山の間を何度も何度も行ったり来たりして、私たちの目を楽しませてくれます。澄んだ青空に白い羽が透けて、その姿はとても美しいものです。10月中旬から下旬に多く通過して行きます。渥美半島では多数が越冬しているの、秋から春までいつでも観察できる馴染み深いタカです。

4、その他のタカ

あこがれのタカと言ったら、やはりアカハラダカでしょう。アカハラダカは、その年の天候によって、観察できる数が大きく変わるようです。朝鮮半島から対馬に至り、一部は福江島方面へ、また一部は九州西岸を通過して琉球列島を通過するルートが知られていますが、天候によっては、伊良湖岬でも2、3羽だけ見ることのできる珍しいタカでした。ところが、1991年「リング台風」の通過した後で100羽近いアカハラダカが観察でき、また1998年には300羽近くが伊良湖岬を通過して行きました。ここ数年は、以前と同じようにごく少数しか観察できません。本当に不思議なタカです。

5、観察時期

お勧めの時期は、10月の第1週目。雨の降った2日後の晴れて風が弱まった日に比較的たくさんタカ（主にサシバ）が観察できます。この頃は、ちょうど本州が移動性高気圧に覆われる時期にあたり、天気が周期的に変わります。休みの日に天気が崩れたりして、悔しい思いをすることも多いのですが、今日は飛ぶぞと予想した





特集：タカの渡り

日に期待どおりの結果になると、ホントに嬉しいものです。

6、観察場所

恋路ヶ浜駐車場付近が観察にもっとも適した所です。秋の渡りは、東に見える尾根筋からタカが現れ、西の三重県の神島方面へ飛んでいくルートが最も観察しやすいと思います。タカの他に多数の小鳥の渡りも観察できます。

多くの鳥は「渡り」と呼ばれる長距離移動をしています。それがわかっている、直接「渡り」を観察するのは、とても難しいことです。ところが、タカはそれがはっきりわかります。「渡り」と言う壮大なロマンが目の前で展開されているのです。今年の秋には、ぜひ「渡り」を見

てください。伊良湖岬のタカは、志摩半島を目指して渡っていきます。みなさんのお家の近くでもたくさんのタカが観察できるかもしれません。



伊良湖岬

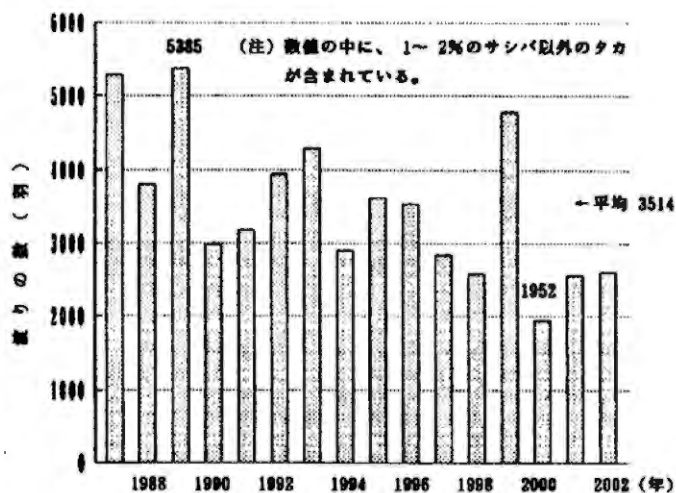
伊勢市におけるサシバの渡り

吉居 清 (伊勢市)

1982年9月に我が家の上空をサシバが渡ってゆくのが発見されて以来、秋のタカ渡り調査は年中行事となり、2002年まで何とか続けてきました。調査場所は我が家の周辺が中心でしたが、2001年からは伊勢の南寄りの渡りを調べるため、内宮に近い浦田町駐車場の東側にある五十鈴川左岸堤防に移しました。本格的に調査するようになった1987年から昨年までに、伊勢でカウントした渡りの数は第1図のようになっています。見落としや調査時間帯以外のカウント漏れがかなりあると思われますが、1990年以降は5,000羽を越えるような多数の渡りがなく、1999年に4,000羽を越える渡りが見られたものの、全体としては減少傾向を示しており、伊勢より東の地域でサシバの生息数や繁殖数が減少している可能性を示唆

しています。

これらの数を伊良湖岬の数と比べると19~39%で、年によって比率は大きく変化しています。それでは、残りのタカはどこを通ったのでしょうか？ 第2図は、これまでに得られた情報か



第1図 伊勢市における1987年~2002年のタカの渡り数



ら、伊良湖岬～志摩半島～三重／奈良県境にかけての、秋のタカ渡りのルートを模式的に示したものです。

三重県支部の前身、三重野鳥の会では日本野鳥の会の全国一斉調査に合せて1986～1988年の3回、全県的な調査を行ったほか、1992年頃までは南勢地区を中心に、有志で調査を続けていました。それらの結果を総合すると、伊勢でカウント出来なかったタカの多くが伊勢市より南の志摩半島中部から南部を通過したものと推定出来るようになりました。

次の疑問は、志摩半島を通過したタカはどのようなルートを通って奈良県に入り、さらに紀伊半島から四国に向かうのか？ と言うことです。奈良県との境にある高見山、台高山脈の南に近い伯母ヶ峰などでは、古くから奈良県の皆さんが熱心に調査を続けられていたほか、櫛田川や宮川の中・上流地域でも三重県支部の方々が何度か調査をされ、まとまった渡りが観察された場所は幾つか見つかりましたが、調査地点が少なく、調査時間も短いため、西に続く渡りのルートは、十分には解明できていません。特に、藤坂峠から台高山脈にかけては調査データがまったく無いため、ルートの推定もできていません。

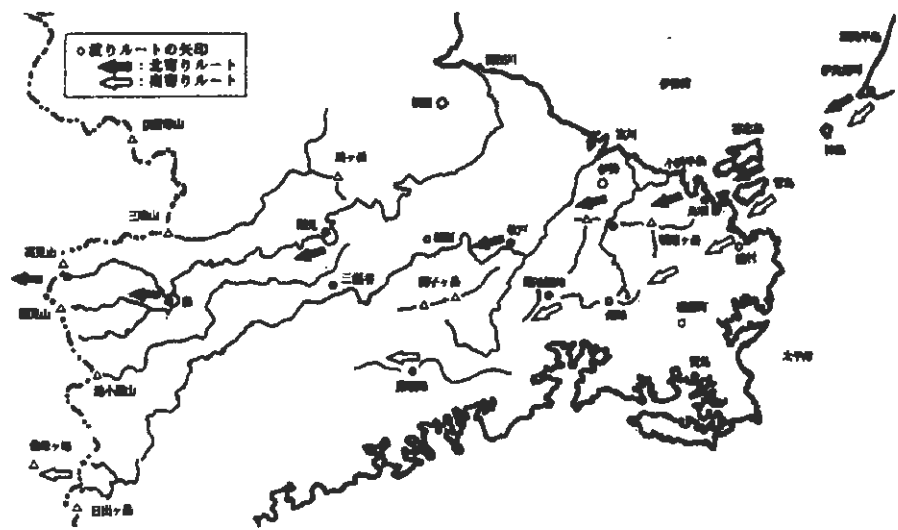
これまでの調査結果から分かったことを整理すると、次のようになります。

- (1) 伊良湖岬から西南西に向かったタカの志摩半島での主な上陸地点は、北は鳥羽市の小浜半島から、南は浦村町の範囲である。
- (2) 志摩半島の北寄りルートをとるものは、小浜半島から朝熊ヶ岳の北側に沿って伊勢神宮の外宮周辺を通る。

また南寄りルートをとるものは、浦村など鳥羽市の南部から朝熊ヶ岳の南側、さらには磯部町付近を通過している。

- (3) 志摩半島の北寄り、伊勢の外宮周辺を通過したものは宮川を越え、櫛田川に沿ってさらに西南西に進み、高見山付近から奈良県に入る。なお、高見山付近を通るタカのうち伊良湖岬から来たものはその一部であり、三重県中部を南西に進んできたものがかなり含まれている可能性が高い。
- (4) 大台ヶ原の最高峰、日出ヶ岳の北西にある伯母ヶ峰の記録から、志摩半島の中部から南部を通ったものの多くは、宮川に沿ってさらに西南西に進み、大台ヶ原を含む台高山脈の南部を越えて奈良県に入るものと思われる。

志摩半島・紀伊半島を通過したタカがどこから海に出て四国に渡って行くのか？については、和歌山県のデータが皆無に近いため、まったく分かっていません。ただ、熱心に調査されている鳴門と伊良湖岬のデータの比較から、淡路島に最も近い加太付近ではないことは確かで、もっと南の方ではないかと推定されています。



第2図 三重県南部のタカ渡りルート



中部地方内陸部のタカの渡りと現在の渡り調査の現状について

熊崎昭之

(岐阜県支部研究部/HMNJ事務局)

秋、巻雲の広がる美しい青空の下でワクワクしながら空を眺めている。そんな方は三重県にも沢山おみえになるのではないのでしょうか？自分もそんな内の一人になり、既に何年になるでしょう・・・。

毎年繰り返される鳥たちの渡り、生き物の移動という壮大なドラマは何回観察してもいいものです。それを一般の観光客の方に目の当たりに実感していただき、感動を伝えることが出来た時。これは何年やっても、嬉しいですね。今では野鳥の会に限らず、沢山の方々がこの時期に岐阜市金華山定点調査地にタカを見に訪れるようになりました。要因の一つにインターネットの普及があります。現在はインターネットを利用したタカの渡り全国ネットワーク(Hawk Migration Network of Japan)が設立され、全国の代表的な調査地点の情報が毎日更新、公開されています。また、ARRCNのサイトでは台湾、マレーシア他アジアまでタカの渡り情報を誰でも見ることができるのです。

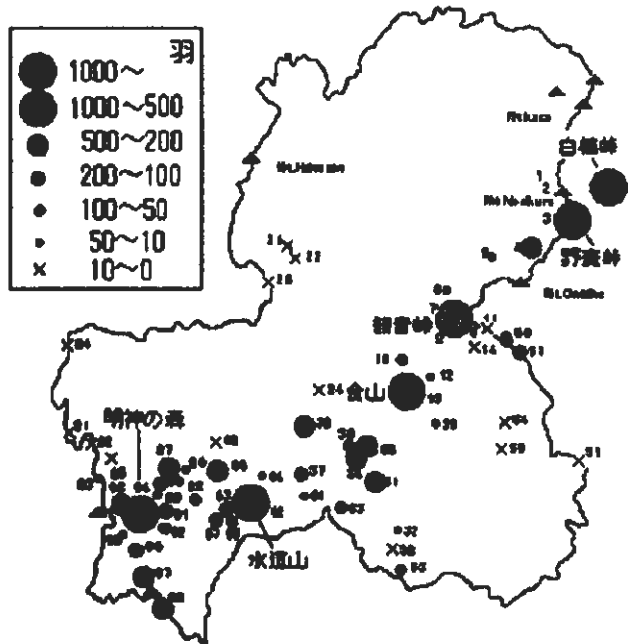
さて、本題の内陸部のタカの渡りについてですが、春期の渡りについては今だ解らないことが多いのですが、秋期については全国的にも数多くの観察記録があり、中部地方のタカの渡りについては改めて今回お話しなくても多分皆さん既にご存知なのではないでしょうか？

中部内陸部の主な定点調査地(以降定点と記載)は、北から新潟県：櫛形山、長野県：白樺峠、岐阜県：金華山、京都府：岩間山、徳島県：鳴門山(以降県名は省略)が代表的な調査地となります。各県ともにその他数箇所の観察地(調査記録)があります。9月初旬～10月末の約2ヶ月間(定点により期間が異なる)、定点調査が実施されています。

中部内陸部のタカの流れは、ほぼこの定点に沿っています。(実際は渡りの流れのある地点に

定点を設けたのですが・・・)ただ種類によって場所・時期共に異なり、タカの渡りの流れはその地域気象条件により様々に変化する上昇気流をつかんで南下する幅広い帯状の空間です。

また、ハチクマについては最南端の日本からの渡去地点がサシバとは異なるため、中部内陸では丁度岐阜県南西部でサシバと分かれ琵琶湖の北側を通過して中国山地へ向かうのが一般的のようです。詳細はインターネットの情報をご覧ください。



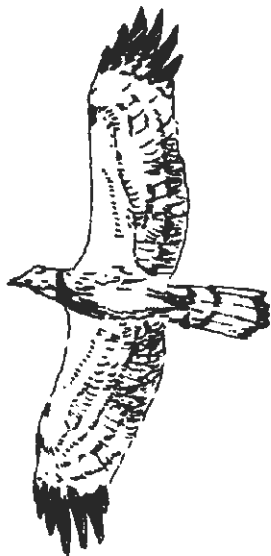
サシバの渡り 1989～96年通過羽数(Max/day)

頂くのが一番早いと思いますが、最近新しい情報としてこれまでの目視調査で数量、方向的に想定してきた信州白樺峠→岐阜金華山→京都岩間山のタカの流れが現在確実に数個体のサシバにより検証されつつあるということです。

これまでの調査は、単独の定点での目視観測のみの調査で数量的な把握、渡来渡去方向を調査しタカの流れを想定してきました。岐阜県支部でも独自で調査を開始して既に16年も経過し、今では支部内では定点調査が人手都合により難しくなっている現状です。しかしながら、信州の白樺峠と連絡を取り合うようになり、ようやく



2001年に全国的ネットワークが確立。そしてアマチュア研究者が全国で連携することにより、各定点の渡り個体数を公開して、隣接する定点のお互いの観察記録との比較が毎日できるようになりました。これによりタカの流れの把握が可能となり、各定点の調査に対する姿勢の向上も図られています。



また、現在は全国ネットワーク連携の強みを目視のみに頼らず、繁殖調査用にテレメトリー調査の発信器の情報をタカの渡り全国ネットワークにて各地の定点へネットワーク内公開しており、受信する調査を推進しています。これに

より目視調査結果の渡りルート検証をこれまでの目視調査と併用して進めております。

現在わずかではありますがその成果がでており、益々テレメトリー受信調査に期待がかかっています。秋期ではサシバは白樺、金華山、岩間山、宮崎の金御岳にて受信に成功しており、ハチクマは白樺、金華山、岩間山、長崎福江島にて受信が成功しております。春期でも昨年白樺峠、金華山を通過した個体が今年、岐阜上宝村で受信でき、その後北アルプス槍ヶ岳付近を越えて長野県の繁殖地で確認されました。これにより岐阜県内飛騨山間部での秋と春のルートが異なる個体がいることが確認できました。これぞ「アマチュアの強みだ！」と言わんばかりの成果だと思っています。

最後にタカの渡り調査（目視調査）の最大の面白みが識別にあると思います。シギチも同様だと思いますが、ハイタカ属の確実な種類の識別。年齢、雌雄、それから”そのう”の膨らみ具合まで

見ることによりいろいろな事柄が見えてきそうです。

自分もこのごろPCの使い過ぎか視力の低下が気になり始めました。でもプロミナーを双眼に改造したり、眼の動体視力を高める訓練をしたりして・・あとは識別しようとする意欲で少しでも多くの個体を見ようと思っています。僕自身、益々タカの渡り調査が面白くなっている今日のごころです。

いかがでしょうか？なにやら、マニアックな話になってしまいましたが、決してそうではなく秋空の美しい巻雲の下、タカたちが繰り広げる渡りという壮大なドラマを見るのが本来の楽しみですよね。皆さんもこの秋、双眼鏡を片手にタカを見にいきませんか？

また、今秋の11/8,9日タカの渡り全国集会在徳島県鳴門市で開催されます。沢山の方々のご参加をお待ちしております。また、文一総合出版からタカの渡りガイドブックも出版予定です。
HMNJ Web Site URL:<http://www.gix.or.jp/~norik/hawknet/hawknet0.html> 熊崎:norik@gix.or.jp

(文中の図は岐阜県支部のHPより許可を得て掲載しました：編集部)

三重県中勢、北勢でのタカの渡り

今回の特集では伊勢以南の渡りについては吉居さんに書いていただきました。

しかし、中勢、北勢地方の渡りについてはまだよく分かっていない部分が多いようです。高橋松人副支部長の話によれば津市、垂水付近から白山町にかけて飛行するルートがあるようで、多い時には1日に280羽ほどが観察できるということです。また北勢では多度山付近を通過する個体もあるようです。また関町、関ニュータウンでも以前ハチクマ等の渡りが見られました。今年は皆さんの近くでも観察してみてください(編集部)



旅人たちとの出会いから

秋田 由美子 (安芸郡 河芸町)

いつでしたかある日の夕刊を見ていた時のことです。紙面いっぱいいろいろな角度から大空を羽ばたくたくさんの鳥の写眞が特集されていました。伊良湖岬を一斉に飛び立つサシバの記事でした。鳥の渡り・鷹の渡りを初めて知った瞬間でした。こんなドラマが毎年行われていたんだ！私も見てみたい！この夢は膨らみ、ついに実現します。



この旅人たちに1年に1度会いたくて、神島を訪れるようになって10年?になりました。期間限定！翼をいっぱい広げて風を受ける彼ら。太陽の光に羽が透けて見え、時には柄の一つひとつが確認できる程です。ぐるぐるとゆっくり弧を描きながら上昇気流を待ちます。うまく上昇気流に乗るやいなや滑空して見事飛び去ります。見る見る内に小さな物体となって目的地に向かう旅人たち。こんな生き方が、はるか昔から毎年繰り返し行われていたなんて感動を覚えます。

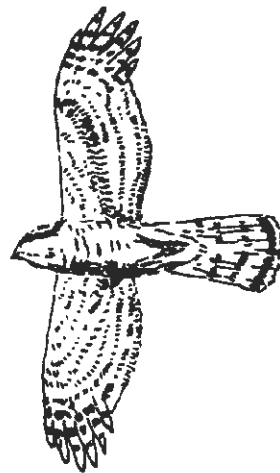
残暑厳しい9月の終わりころ、吹く風にどことなく秋の気配を感じます。その季節の移ろいを旅人たちは、見逃しません。旅支度を整えて南へ南へと移動を始めるのです。

10月の初旬、私は早朝から神島灯台を目指して山を登ります。対岸を望めば、あの伊良湖岬が

手の届くような距離のところにあります。朝日が上る頃、昨夜の宿を伊良湖の雑木林で過ごした旅人たちが、南に向かって一斉に飛び立ち始めます。じっと伊良湖方面を眺めていると、いつのまにか目の前をたくさんの群れが近づいて来ているではありませんか！風のある日は、苦しそうに喘ぎながら海上すれすれにやって来ます。灯台の所からは彼らの背中側や横側を見ることができます。一羽、そしてまた一羽。絶好の旅日和ですと、何十羽というタカたちが群れになって、次から次へとやって来ます。丁度神島上空で翼をいっぱいに広げ、旋回を始めます。「タカ柱」と呼ばれる状態でしょうか。どんどん空高く舞い上がり、上昇気流とともに流れるように消えていきました。「無事に目的地まで行けますように・・・」と祈る思いで見送りました。あの小さな体でありながら地球規模の大旅行を行う彼らに待ち受ける困難！何千キロという旅の途中、悪天候に巻き込まれることもあるでしょう。体力維持のため、渡りをする小鳥を食しながら移動するのですが、うまく食にありつけず衰弱して死んでいくタカもいます。

もちろん同じ時期に渡りをする小鳥たちも必死です。タカにねらわれないように、海上ストレス

をまるで雲の動きのように移動する小鳥の群れ。みんなみんな必死で生きているんだなあと思いました。



ところでタカたちは、南西諸島の島々に着く頃は、体力を使い果たしてへとへとになり、素手でつかめる位になっている

と聞きます。こんなにも命がけの苦しい旅を、毎年毎年くり返しているのです。そして、翌年3月から5月にかけて、再び、本州を目指してやってきます。田畑の広がる山合いの里に棲み、子育てを行います。残念ながら、そのころのサシバをま



だみたことがありませんが……。しかし、現在彼らの生きていく環境は年々厳しくなっています。森林は伐採され、山は崩されて、彼らの棲息・繁殖する場がどんどんなくなりつつあります。事実渡りをするタカの数も年々減っているように思います。地元の方の話によると、ずいぶん前には、神島においても何百羽というタカ柱が立ったといわれています。人間の身勝手な開発が、自然に生きるものたちの命を、そして私たち人間自身の命をも脅かすことになってはいないでしょうか。国内

はもちろん地球規模でこうした生き物たちとお互いに共存できる方法を考えねばならない時期にきています。

そう速くない何年か後、「昔は秋になると、神島上空をタカが渡っていったような」という昔話にならない事を祈ります。食物連鎖の頂点に立つワシタカ類がいなくなると、自然界の掟がきっと乱れてくることでしょう。旅人たちの将来に危惧を抱きながら、今年の秋、東南アジアに旅立つ勇壮な姿に会いたくて、何度目かの神島を訪れる事でしょう。

今年出会った「ほととぎす」

越川 経男（津市）

今年も家にいてほととぎすを聞いた。我が家は津市垂水山に開かれた団地の一角にあるが、幸い、古墳と山寺に挟まれて、自然が残る恵まれたロケーションにある。ほととぎすの初音は五月の初旬。歳の子供が毎日目覚めが早い。まだ夢うつつの午前四時ごろ、まちがいなくほととぎすの声に耳を澄ました。薄明りとまでいかぬ未だくらい空気の中を、二回、三回、きれいな冴えた声が透るのを聞いた。思わずからだを起こして窓を開けた。朝の空気は水蒸気を含んでいるのかモヤッているようにも思われたが、夜明け前の静寂さはほととぎすの声を一層引き立たせた。

ほととぎす鳴きつる方を眺むれば
まだ有明けの月ぞ残れる

少年の頃「百人一首」で覚えた和歌のひとつである。平安時代、大官人が未明の空を仰いで鳥の行方を追ったけど、ほととぎすの姿はなく、ただ有明けの月だけが残っていたという昔人の情感と憧れが詠まれている。私はこんなとき、まさに、千年前と同じ情景のなかに埋没し、千年前の大官人と全く同じ感動を共有する。まさに至福の時間である。

私がほととぎすの鳴声を初めて知ったのはまだ最近のことである。一昨年五月、松阪地区野鳥の会の有志にお供して、森林公園から観音岳へパードウオッチングにでかけたときである。

しろちどり 40号

キョッキョ、キョッキョ、キョッキョ
キョ.....

美しくもの悲しい鳴声がひときわ高くこだまして響いた。二度三度繰り返されたが、そのときリーダーがほととぎすだと教えてくれた。その直後、尾根から谷を横切るほととぎすの優雅な姿を一目みてこの上ない感動を覚えた。もちろん初めてである。私は十年ほど前から健康のために山歩きを楽しむが、津市の郊外、経が峰（標高819米）にはよく登る。今にして思うと実はそのころから、つまり十年前からズーッとほととぎすの鳴声は聞いていたことになる。はじめは鶯の鳴きそこないかなと思っていた。私の野鳥に対する関心はその程度のものでしかなかったのを、今は恥ずかしいと思う。五月六月はほととぎすを聴くのを楽しみのひとつに経が峰には登ることが多い。早朝の山頂近くはまさにほと





とぎすの独壇場である。私の好きな句に

研して山ほととぎすほしいまま
杉田 久女

というのがある。このとき私は、山と、谷と、ほととぎすと・・・そして自分と・・・空も空気も・・・全部が自然のなかに一体化する。

今年四月、機会があつて妻と二人で山形県を旅した。山寺（立石寺）、銀山温泉、最上川舟下り、羽黒山、湯の浜温泉、酒田と回った。いく先々で芭蕉の句碑が旅情を誘った。帰宅してから芭蕉と同じ行程をたどったことを知り、「奥の細道」を読み返してみた。

月日は百代の過客にして行きかう年もまた旅人なり。・・・・
古人も多く旅に死せるあり。

で始まる有名な前文である。読み進むうちにほととぎすの句を発見した。芭蕉は白河の関にかかる少し手前で、

野を横に馬引き向けよほととぎす

と詠み、仙台松島では、芭蕉に同行した曾良が

松島や鶴に身を借れほととぎす

と詠んだ。「奥の細道」にこの二句を見付けて嬉しかった。これも俳句のなかに見つけた今年のほととぎすであった。

今年はまだひとつのほととぎすにめぐりあつた。妻に誘われて奈良市の郊外に松伯美術館を訪ねた。妻は日本画に興味があつて、このときは上村松園の美人画をみるのが目的であつた。美術館には、松園、松皇、淳之の三代にわたる作品が展示されていた。日本画の落ち着いた雰囲気には吸い込まれる思いであつたが、淳之の作品のなか「ほととぎす」を見つけたのが望外の喜びであつた。薄墨のように彩られた山と谷を背景にあしらって、翔く姿をとらえたもので優雅ということばのほかには表現のしようがなかつた。私には、今年出会ったもう一つのほととぎすであつた。

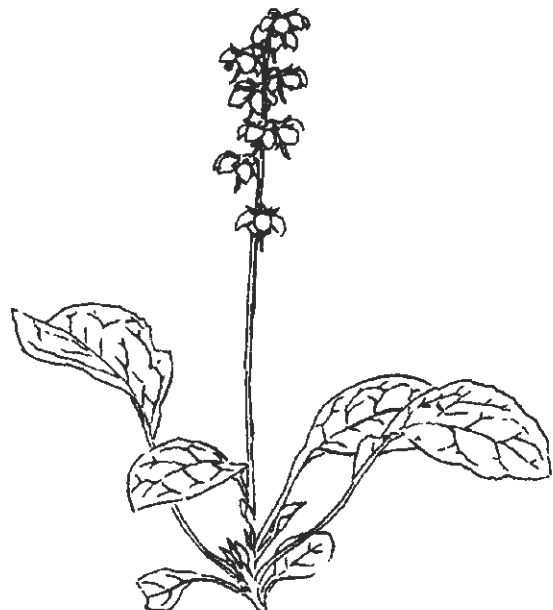
美杉探鳥会に参加して

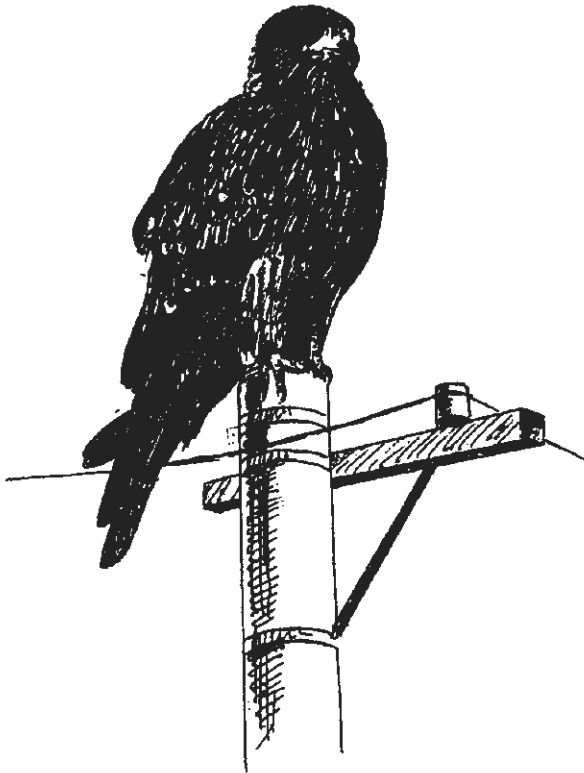
福島由美子（一志郡 嬉野町）

J R伊勢奥津駅前に集合し、各自の車で三重大学演習林に行きました。溪流に沿って登っていき、途中で、キツツキ類がエサ場になっている一本の高さ1.5mもない枯れ木を見ました。こんな枯れ木を何か所もつついて穴をほって中の虫を探しているようすがうかがえました。こんな朽ちた木が鳥の命を保っていることを知りました。

溪流にはカワガラスがいると聞き、川を覗くとカワニナがいました。演習林の駐車場で弁当の夕食を食べ、その後、日が暮れるまで、近くの山道を徒歩で上ると枯れた高い木の先端でオオルリが、高らかにさえずり、フワフワとカケスが頭上を越えていき、アカショウビンがキョロロロ.... と鳴いてくれて道を横切っていました。感動しました。

日が暮れてきたので駐車場に戻り、今日のメイン・イベントのコノハズクの鳴き声を待ちました。長い沈黙が続き、ぼつぼつ帰りの時間か近づいた時、何人かの人たちが鳴いた！聞こえた！と言ってみえましたが、私の耳には届きませんでした。残念でした。また来年もぜひ参加させていただきたいと思っています。





ツバメの営巣

田中 豊成 (名張市)

(財)日本野鳥の会で野鳥を観察する際の心得としてフィールドマナーの「やさしいきもち」というのがあります。最初の「や」は「野外活動、無理なく楽しく」で、最後の「ち」は「近づかないで、野鳥の巣」とあります。しかし、ツバメに関しては「近づかないで、野鳥の巣」は当てはまりません。自ら進んで民家の軒下等に営巣をしています。

私の家には全くツバメは営巣していなかったのに、今年初めて作業場の2階の部屋に営巣をしたので、よく観察することができました。

4月下旬に番のツバメが1階によく来るようになりました。仕事が終わるとシャッターや窓を閉めてしまいます。朝、ドアを開けるとツバメ2羽が作業場の2階で飛び回っているのであわてて窓を開けてあげます。そんなことが何回かあったので夜も窓を開けたままにしていました。

そうこうするうちに5月4日から蛍光灯の傘に泥を運んできて巣を作り始めました。巣材は泥と枯草で、5月13日に完成しました。

第一卵は5月15日で、毎日早朝に産卵し18日に第4卵を産み終えました。巣の入り口と天井は5cm程度しか空いてないので、目では確認できないので親が留守の時にそっと手を入れたり鏡で確認しました。

抱卵は5月19日から6月1日までの14日間でオスメスが交代で抱卵をしていました。

孵化は6月2日でしたが、4卵中2卵しか孵化せずいつの間にか未孵化の卵はなくなっていました。巣の下には孵化後の半分に割れた卵が落ちていて計測すると短径12mm長径約20mm、白地に淡褐色の小さな斑が点在しています。

雛は6月22日まで親から餌をもらっていました。

6月22日の午前8時ごろに一羽が窓におり、もう一羽は部屋の中の作業台の上でおりましたが、そのうちに窓から飛び出て近くの電線にとまって親から餌をもらっていました。更にその後もっと遠くの電線に飛んでいきました。飛び方は意外にもしっかりとした羽ばたきでした。その後1週間ほどは夕方になると親子は作業場で寝ていましたが、雛達はもうこなくなりました。

ツバメの親はここが気に入ったのか、7月1日から5日まで計5卵を産み、今又抱卵をやっています。2番子の誕生が楽しみです。

二つの命が誕生して21日目に我が作業場の窓から飛び去った時には嬉しかったと同時に感激しました。巣立ちというのはテレビ等で見ていて分かっているつもりですが、実際に目の前で見ると感慨ひとしおでしたし、大変嬉しく思いました。これからは自立して生きていくのに大変だと思うのですが、頑張って生き延びてほしいものです。

ツバメだけではなく、親たちは子を育てるのに全身全霊で取り組んでいるのを見て考えさせられるものがありました。



日頃思っていること

浅野 サキ子 (四日市市)

3年ぐらい前から夏になると、とても騒がしい鳴き声が気になる様になりました。この鳴き声は所々で鳴いてはいたのですが夏が過ぎると忘れていました。でもやっぱり気になるので今年は鳴き声CDを買って確かめたのです。「ホトギス」でした。山登り、山歩きを趣味にしているのですが、その途中鳴き声だけで姿が見えないので、どんな鳥か知りたくて野鳥の会に入りたいなあと思っていました。探鳥会に出かけても、自分では探す事も出来ません。よく知っている人に望遠鏡で探してもらって覗かせてもらって初めて何々やなど分かる程度ですが楽しいです。でもネ もっとP・Rしてもいいんじゃないですか？ 私 野鳥の会って一般の人が入れるのかなあって思っていました。紅白の時しか知らなかったもので、たまたま四日市主催の自然観察会の時に野鳥の会の方がいて教えてもらったので、初めて知りました。私みたいに 何処へ？誰に？申し込みはどうすればいいのか？分らない人が多いと思います。私はラッキーな方だと思いました。これからも身近な鳥から鳴き声や名前を覚えて楽しみたいと思います。

(野鳥の会のPR方法について何か良い案がありましたら編集部までお寄せ下さい)



ハシボソミズナギドリ大量死

顛末記

岡 八智子 (安芸郡 安濃町)

5月25日 ちょうど他の珍鳥の情報で安濃川河口へ出かけた折、強風でその珍鳥はいませんでした。その代わりハシボソミズナギドリの姿があちこちにありました。2週間前五主海岸でその姿を四日市の阿部君が発見しており、私はそれ程気にもしていませんでした。その強風の中、カイト・サーフィンに興じる若者と同じ波にゆれて浮かんでいたり、飛んだりしていました。が早朝より来ていた名古屋のAさんの手に「さっき波打ち際で最後の最後まで飛ぼうとして生き絶えた」という1羽のハシボソミズナギドリが・・・それがその後この大量死の始まる1羽目？とは思いませんでした。その後次々聞こえてくる情報に驚くばかりでした。三重支部の事務局からも連絡入ったのですが、野鳥の会の一員としてどう対処していいのかも分かりませんでした。新聞・テレビになかなか野鳥の会の名やトップの顔が前面に出てこず、いらいらするばかりでした。最後に全国放送のワイドショーでやっと電話での支部長のコメントが流れ、ほっとしました。

結局 死んだハシボソミズナギドリは三重県下で約2400羽もの数になったということです。若鳥が北上中低気圧に巻き込まれ力尽きたのでしょうか。その原因の一つに鯨との餌の競合で、オキアミが不足して充分育っていないとの推測もあります。ハシボソミズナギドリの大量死にはまだ謎が一杯のようです。巣立ちするまで親鳥が必死で育てたのにほんとに哀れですがこれも自然の一コマなのでしょう。この情報化時代に電話、携帯・メール等で連絡し合い、手分けしてその数を三重支部で把握出来なかったのかと後で残念に思ったのは私1人ではなかったかと思えます。阿漕浦の浜も歩くとたくさん悲しい姿があり、28日に友人とそれを集めて埋葬しました。全部で85羽にもなりました。色々考えさせられる一件でした。



連載：ポーポ一日記 PART II (続編)

橋本富三 (津市)

4月〇日

コツコツコツコツ、木をつつく音が頭の上から降ってくる。頭上の雑木林を見渡す。姿は見えない。また音がする。キツツキには違いがないがコゲラより力強く感じる。アカゲラかな！ またコツコツ。もう一度ゆっくり見渡す。アリアー、すぐそばの枯れた赤松に5センチくらいの穴が開いて、音はその中から響いてくる。穴の中で反響するのかがはっきりと大きく聞こえる。少し離れて様子を見ることにした。しばらくしてコツコツ音がやみ、くちばしに木屑をくわえたコゲラがヒョイと顔を出す。キョロキョロ周りを見渡してパッと巣から飛び出し、しばらくして戻ってくるとまたコツコツ。

何とコゲラ君、マイホーム作りの真っ最中だ。己のクチバシー一本で作るこれが元祖ログハウス。設計ミスや手抜き工事、ましてローン地獄なんて無縁の世界。私はこのコゲラ君に大棟梁と名前をつけた。

その後このログハウスは赤松の根っこから、ヒトに切り倒されてしまったので営巣は出来なかったようだ。まさか自分のログハウスにこんな天変地異が起ころうとは。でも大棟梁は文句も言わず、ギーギー鳴きながら、またどこかで新しいログハウスを作るのだろうか。

5月〇日

昨夜、酒脳会議において、この会を、はまちどりの会と命名するとの長老発言をうけ、大いに盛り上がった一同であったが昨日に続いて今日も軽井沢は雨だあ～あった～。美し国、伊勢から高い高速道路料金をものともせず、はろぼろとみすずかる信濃の、泣く子は黙るが、お婆さんは黙らない、野鳥のメッカにやってきたというに今回は全くついていない。お互いに、あの雨男 or 雨女と一緒に来たせいだ (自分だけは決して雨男 or 雨女では無いと堅く信じている) と腹の中ではのしり合うが、そこは紳士淑女の集まりであるこの会の面々、決して口に出しては言わない。(本当

は後々のことを考えると怖くて言えない)。

で、軽井沢のバードウォッチングを即決であきらめ霧ヶ峰へ。(あきらめがよいのもこの会の特徴) 昨年行った霧ヶ峰はノビタキがツクダニ状態(*注 I 相談役が勝手に作った造語。ぎょうさんおることの意味。)だったので夢よもう一度というわけだ。しかし雨男 or 雨女の魔力はここでも衰えず、文字通りのキリヶ峰状態である。霧ヶ峰よおまえもかと嘆く中、はまちどりの会の淡い希望は、海のモズクと砕け散った。

道すがらに、〇姫が発見したダチョウとスズメの混群が、唯一今回の貴重な成果であった。、ダチョウはほぼ2次元移動に終始する大型鳥類であり観察は極めて容易である。またこれを捕食するに甚だ美味であるのは間違いない。日本の食料事情はこれにて安泰。ホーホーホーというH会長のウンチク発言をかみしめながら、みんなでじっくり観察しフィールドノートに初見、捕食、日本安泰と書き込んだ。

それにしても日本野鳥の会発行の図鑑にダチョウは載っていない。野鳥の会に日本初見を報告すべきだろうか。Nリーダーは帰りの車の中でうわごとのように繰り返していたのが気がかりであった。

こんなはまちどりの会に明日はあるだろうか。不安になるB担当であった。(続く)



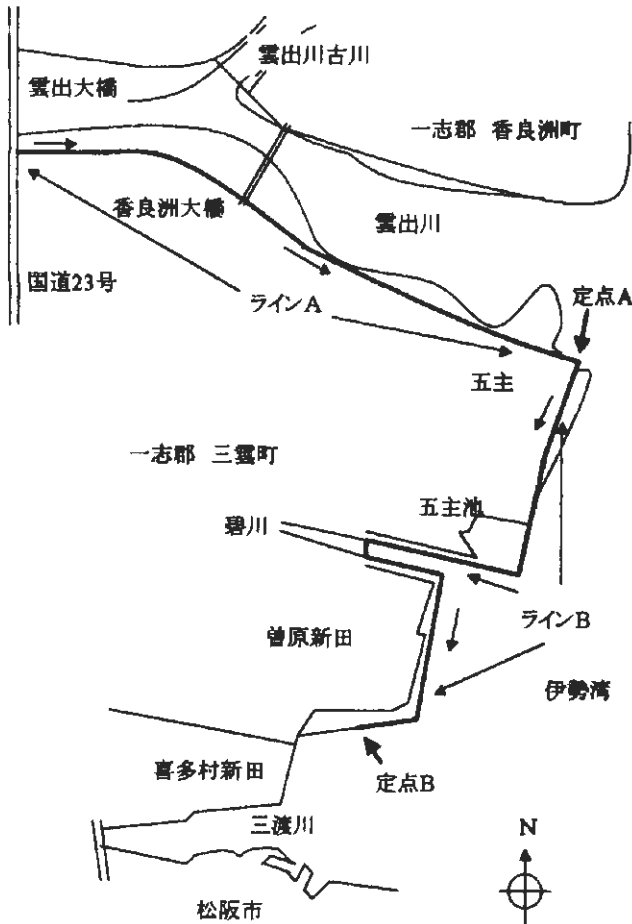


五主海岸鳥類調査

久住勝司 (一志郡嬭野町)・
平井正志 (安芸郡安濃町)

緒言

伊勢湾岸ではかつて、木曾三川河口、四日市周辺には広大な干潟が存在した。しかし、それらは河川改修、工業用地、農地造成のため、ことごとく消滅した。現在は庄内川河口の藤前干潟、朝明川河口の高松海岸、および雲出川河口の五主海岸のみが大規模な干潟として残っている。このうち、前2者は工業用地、住宅地に囲まれ、満潮時にシギ・チドリが休息する水田、沼地等の後背湿地がない。しかし、五主海岸では干潟のすぐ後に農地、水路、若干の池が残され、現在となつては長距離を渡るシギ・チドリにとって極めて貴重な渡りの中継地となっている。



第1図 調査地域

第1表 水鳥個体数の変化

種名	2001年	2001年 (修正値)	2002年	増減	変化率
カイツブリ	185	142	229	87	1.61
ハジロカイツブリ	5	4	0	-4	0.00
カワウ	2325	1027	1785	138	1.08
ゴイサギ	77	73	105	32	1.43
アマサギ	454	351	146	-205	0.42
ダイサギ	601	465	385	-80	0.83
チュウサギ	21	8	9	1	1.08
コサギ	361	265	261	-4	0.98
アオサギ	331	225	220	-5	0.98
サギ類総数	1845	1368	1128	-262	0.81
ツクシガモ	0	0	1	1	-
マガモ	6666	6208	3055	-3151	0.49
カルガモ	228	144	148	2	1.02
コガモ	463	257	192	-65	0.75
ヨシガモ	12	11	83	72	7.55
オカヨシガモ	406	377	516	139	1.37
ヒドリガモ	4078	2795	4492	1697	1.81
アメリカヒドリ	1	1	0	-1	0.00
オナガガモ	2794	2707	2844	138	1.05
ハシビロガモ	57	40	40	0	1.01
ホシハジロ	1312	1242	748	-494	0.60
キンクロハジロ	1520	1456	1361	-95	0.93
スズガモ	254	227	441	214	1.84
ミコアイサ	1	1	0	-1	0.00
ウミアイサ	83	83	9	-54	0.14
カモ類総数	18055	15525	13928	-1597	0.90
バン	6	3	7	4	2.33
オオバン	58	45	8	-37	0.18
ミヤコドリ	25	16	16	1	1.03
コチドリ	1	1	0	-1	0.00
シロチドリ	120	68	196	128	2.86
メダイチドリ	10	8	5	-3	0.85
ダイゼン	25	12	41	29	3.49
ケリ	27	16	29	14	1.87
タゲリ	0	0	6	6	-
キョウジョシギ	39	23	77	55	3.42
トウネン	17	4	3	-1	0.71
ハマシギ	1697	1425	598	-829	0.42
コオバシギ	3	1	0	-1	0.00
オバシギ	89	24	0	-24	0.00
ユビシギ	6	2	0	-2	0.00
エリマキシギ	1	0	0	0	0.00
オオハシシギ	6	6	0	-6	0.00
ツルシギ	35	35	59	24	1.69
コアオアシシギ	5	5	12	7	2.40
アオアシシギ	41	16	14	-2	0.90
クサシギ	2	2	0	-2	0.00
サルハマシギ	8	6	0	-6	0.00
キアシシギ	177	147	156	9	1.06
イソシギ	23	14	20	6	1.40
ソリハシシギ	47	13	9	-4	0.71
オグロシギ	15	4	0	-4	0.00
オオソリハシシギ	121	33	48	15	1.44
ホウロクシギ	6	2	0	-2	0.00
チュウシャクシギ	65	17	51	34	3.00
タシギ	31	31	13	-18	0.42
セイタカシギ	1	1	3	2	3.00
シギ・チドリ総数	2641	1928	1354	-574	0.70
ユリカモメ	2640	2323	2727	404	1.17
セグロカモメ	404	404	221	-183	0.55
ウミネコ	3612	1755	282	-1473	0.16
ズグロカモメ	0	0	2	2	-
コアジサシ	0	0	15	15	-
カモメ類総数	6656	4481	3247	-1234	0.72



今回は五主、曾原新田の海岸部に飛来するシギ・チドリ等水鳥を主体として調査した。なおこれは2001年に三重県からの委託を受け、調査した結果に今回新たに2002年の観察結果を加え、加筆、修正したものである。

調査集計方法

ライン調査：2001年1月から2002年12月まで2年間シギ・チドリの調査を主目的として、調査ライン及び定点は、雲出大橋南詰から出発し、ラインA、定点A、ライン

B、および定点Bである（第1図）。観察はおおむね月1回とし、2002年の渡りの最盛期である9、10月には調査回数を増やした。

調査時間はおよそ次の通りであった。ラインA＝平均33分、定点A＝平均47分、ラインB＝平均38分、および定点B＝平均37分。

第2表 陸鳥個体数の変化

種名	2001年		2002年		増減	変化率
	(修正値)					
ミサゴ	6	4	2	-2	0.57	
トビ	18	15	29	14	1.93	
オオタカ	2	2	0	-2	0.00	
チュウヒ	1	1	1	1	2.00	
チョウゲンボウ	0	0	1	1	-	
ハイイロチュウヒ	3	3	2	-1	0.67	
ノスリ	0	0	1	1	-	
キジ	0	0	2	2	-	
キジバト	28	26	22	-4	0.85	
カワセミ	1	1	6	5	6.00	
ヒバリ	13	10	8	-2	0.82	
ツバメ	129	64	64	0	1.00	
キセキレイ	2	1	0	-1	0.00	
ハクセキレイ	55	38	42	4	1.11	
セグロセキレイ	8	5	22	17	4.40	
タヒバリ	0	0	5	5	-	
ヒヨドリ	37	28	159	131	5.68	
モズ	27	16	16	2	1.11	
ジョウビタキ	4	4	4	1	1.14	
ノビタキ	1	1	0	-1	0.00	
インヒヨドリ	1	1	0	-1	0.00	
ツグミ	18	18	26	8	1.44	
ウグイス	1	1	4	3	4.00	
オオヨシキリ	35	35	39	4	1.11	
セッカ	24	20	22	2	1.09	
ホオジロ	49	38	53	15	1.39	
オオジュリン	9	9	0	-9	0.00	
カワラヒワ	38	38	128	90	3.37	
マヒワ	0	0	2	2	-	
スズメ	618	527	995	468	1.89	
ムクドリ	60	59	288	209	4.52	
ハシボソガラス	557	488	325	-163	0.67	
ハシブトガラス	1	1	0	-1	0.00	
スズメ目総数	1687	1401	2184	784	1.56	

観察個体数の変化：2001年は観察日数が多いので、結果を2002年の値と直接比較することはできない。また定点Bは2002年7、8月に工事中であり観察できなかった。そこで2001年9月＝4回、2001年10月＝2回の観察データはそれぞれ月ごとに平均してその月の値とし、さらに2001年7、8月の定点Bでの観察数を差し引いて2001年修正値とした。その他随時調査した結果のうち特に貴重な記録を加えた。

調査結果

鳥類全体の増減

2年の観察数を比較するとサギ類、カモ類、シギ・チドリ類はすべて減少した。特にシギ・チドリ類の個体数は2001年のその70%に減少した（第1表）。この結果は2年のみの比較なので、長期の減少傾向を示すのか、短期の変動なのか不明である。しかし、環境の特に後背地の変化による悪影響も考えられる。

一方陸鳥が全般に増加し、特にムクドリ、スズメ、ヒヨドリが顕著に増加した。堤防工事や湿地の埋め立てにより、市街地あるいは一般農地に似た環境が五主海岸にもせまりつつあるのではないかと懸念される（第2表）。

観察個体数が多く、かつ著しく減少した種はアマサギ、マガモ、ウミアイサ、オオバン、ハマシギ、オバシギ、タシギ、ウミネコ等であった。オオバンは2001年に五主池で越冬する大群が見られたが、2002年ではみられなかった（第1表）。

シギ・チドリの主な種における個体数の増減

第3表、及び第4表にシギ・チドリ類の観察結果を示す。

シロチドリ：2001年には秋に渡りに明確なピークがあったが、2002年は越冬期にピークがあり、1月20日に35羽、12月15日に60羽の越冬



群が観察され、個体数が増えた。また4月から6月にかけて観察された個体は繁殖個体であろう。

その他のシギ・チドリ：ハマシギの越冬個体数は変わりなかったが、2001年は3月と10月に500羽を越える群が観察されたが、2002年は春秋の渡りの個体数が少なく、全体として減少し

た。オバシギは2001年9月に秋の渡りが観察されたが2002年はまったく見られなかった。アオアシシギは2002年には秋の渡りが観察されず、3分の1に減ったが、これは定点Bでの観察が工事のためできなかったためである可能性が高い。キアシシギは秋の渡りが他のシギ類よりも

第3表 2001年五主海岸ライン調査結果

調査日	1/20	2/24	3/25	4/22	6/3	6/24	7/28	8/19	9/2	9/15	9/24	9/30	10/14	10/27	11/25	12/30
ミヤコドリ	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	8	2	4	0
コチドリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
シロチドリ	10	6	6	7	0	2	0	3	7	10	10	33	4	10	9	3
メダイチドリ	0	0	0	7	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0
ダイゼン	1	0	2	0	0	0	1	0	10	0	0	1	7	3	0	0
キョウジョシギ	0	0	0	0	0	0	0	17	15	1	5	1	0	0	0	0
トウネン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	7	0	0	0	0	0
ハマシギ	104	208	555	0	0	0	0	0	0	0	3	17	0	515	155	140
オバシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	30	19	18	15	0	7	0	0
ミュビシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0
ツルシギ	0	0	21	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コアオアシシギ	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
アオアシシギ	5	0	4	0	0	0	11	13	0	0	0	0	4	1	2	1
キアシシギ	0	0	0	1	1	0	50	85	29	2	0	2	7	0	0	0
イバシギ	1	0	1	2	0	0	3	4	0	0	1	2	4	5	0	0
ソリハシシギ	0	0	0	0	0	0	0	4	19	6	16	2	0	0	0	0
オグロシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	8	0	0	0	0	0
オオソリハシシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	5	25	28	53	9	3	0	0
チュウシャクシギ	0	0	0	1	0	0	0	0	31	24	8	1	0	0	0	0
タシギ	5	0	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0
セイタカシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

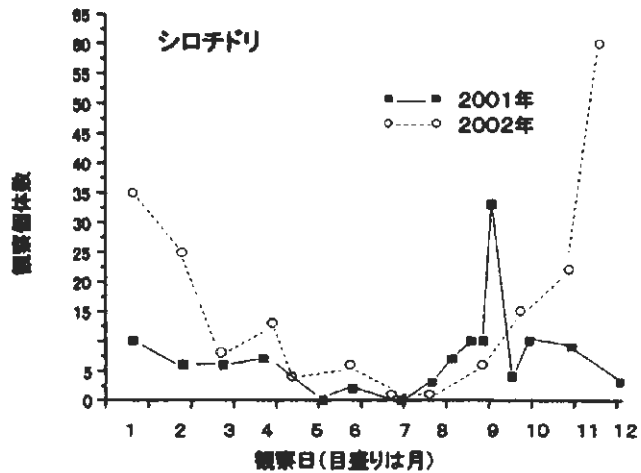
第4表 2002年五主海岸ライン調査結果

観察日	1/20	2/23	3/23	4/28	5/12	6/22	7/21	8/17	9/23	10/20	11/23	12/15
ミヤコドリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0
シロチドリ	35	25	8	13	4	6	1	1	6	15	22	60
メダイチドリ	0	0	0	0	0	0	3	1	0	1	0	0
ダイゼン	7	6	0	0	0	0	0	0	1	3	18	8
ケリ	0	10	0	8	0	3	2	3	0	0	3	0
タゲリ	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
キョウジョシギ	0	0	0	1	49	0	0	27	0	0	0	0
トウネン	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ハマシギ	53	277	2	0	6	0	0	0	0	41	85	132
ツルシギ	0	0	15	29	15	0	0	0	0	0	0	0
コアオアシシギ	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	4	1
アオアシシギ	2	1	1	3	3	0	0	0	0	2	2	0
キアシシギ	0	0	1	15	68	0	1	69	0	2	0	0
イソシギ	2	1	0	3	3	0	1	1	0	5	4	0
ソリハシシギ	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0
オオソリハシシギ	0	0	0	25	16	0	0	0	0	7	0	0
チュウシャクシギ	0	0	0	19	32	0	0	0	0	0	0	0
タシギ	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	6	0
セイタカシギ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

注：斜体は2年間での観察最高個体数を表す



早く、両年とも8月にピークがあった。キアシシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、キョウジョシギは2001年には春の渡りがほとんど観察できなかったが、2002年春には明確なピークがあった。オオソリハシシギ、チュウシャクシギでは2001年秋にピークが観察された。ツルシギは両年とも春に渡りのピークが見られ、秋には観察されなかった。2年にわたる観察結果から、シギ・チドリの飛来には年次間の変動が大きく、今後も、継続的な調査が必要と考えられる。



シギ・チドリ類の減少

シギ・チドリ類は豊富に見られるものの以前の記録(ツルシギ64羽、ムナグロ56羽、チュウシャクシギ320羽、キアシシギ684羽：多田弘一氏：1996年秋：しろちどり第14号12ページ、ケリ209羽、1996年8月15日 多田弘一氏：しろちどり第16号、12ページ)にあるような大群は両年とも見られなかった。シギ・チドリの飛来は急激に減少しているものと考えられる。全国的な減少に加え、当五主海岸での後背湿地の埋め立て、コンクリート護岸化、宅地開発、堤防工事などが影響していると考えられる。

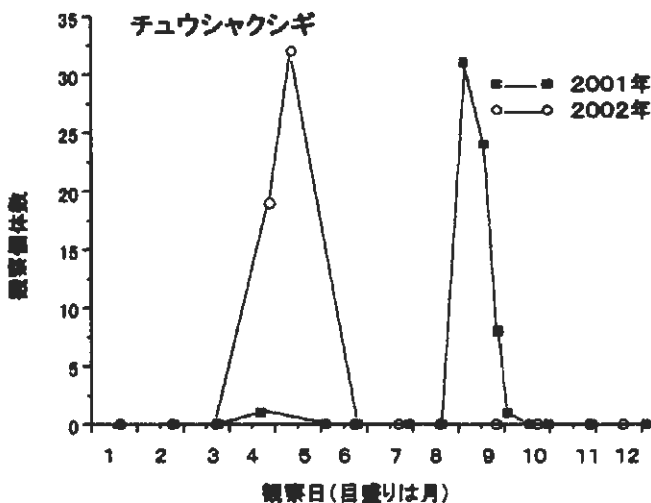
特筆すべきシギ・チドリ類

今回2年間のライン調査で観察されシギ・チドリ類で比較的稀な種類は、ミヤコドリ、ホウロクシギ(VU)、コアオアシシギ、オオハシシギ、セ

イタカシギ(EN)であった。ミヤコドリは毎年定期的に越冬し、飛来数も多い。ミヤコドリの個体数の多さは全国的にも特筆すべきであろう。またコアオアシシギは2年とも観察され、定期的な飛来、越冬であろうと思われた。今回のライン調査以外の観察ではサルハマシギが2001年9月に見られた。

カモ類及びカモメ類

また1999年に銃猟禁止区域に指定されて以来、カモ類が著しく増えた。マガモ、ヒドリガモ、オナガガモが多く、海ガモではホシハジロ、キンクロハジロが多かった。カルガモは幼鳥が観察されたので、繁殖しているものと推定される。また今回の調査では観察されていないが、シマアジも1996年以降春には毎年観察され、最高で5羽が観察された。今回の調査では観察されなかったが、アカツクシガモ(DD)(1993年10月20日：新聞等)コクガン(VU)の記録もある。ツクシガモ(EN)は2002年12月15日に1羽が観察され、以前の記録としては(1996年1月9-24日4羽、2000年2月12-16日1羽)(支部会員観察)がある。また2002年にはライン調査でズグロカモメも観察された。これまでも何度か観察されており、恒常的に越冬しているものと思われる。



猛禽類

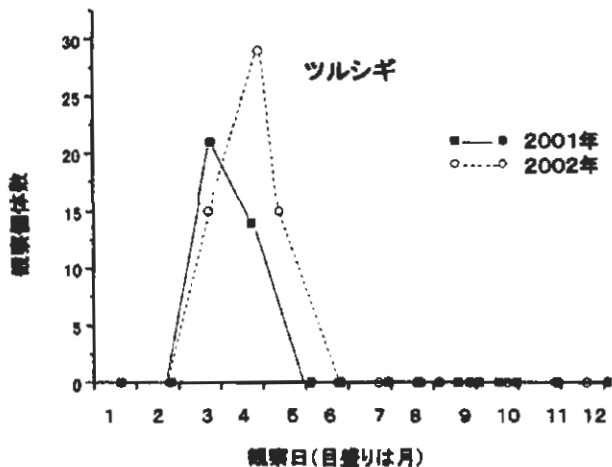
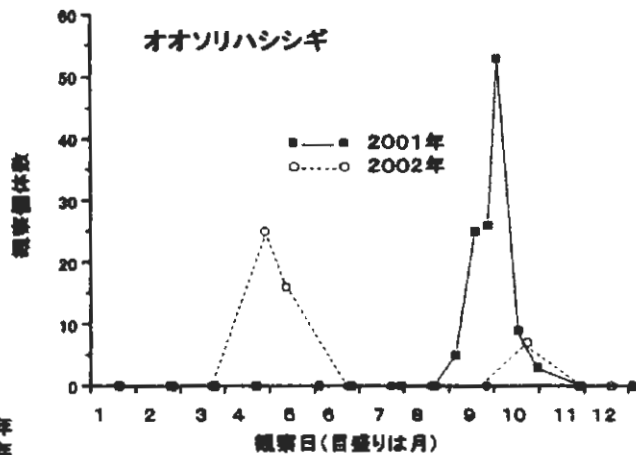
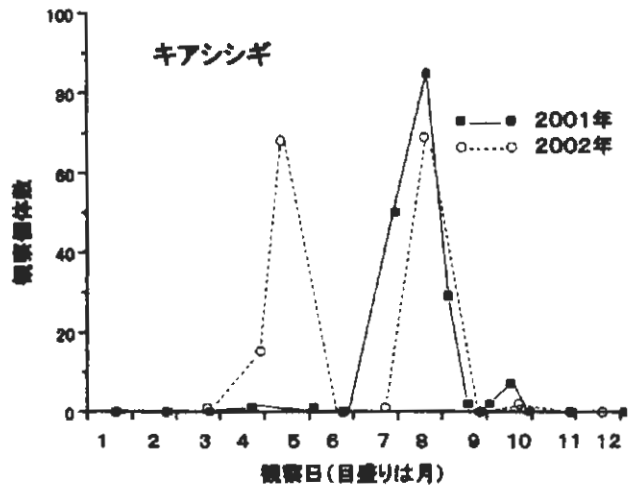
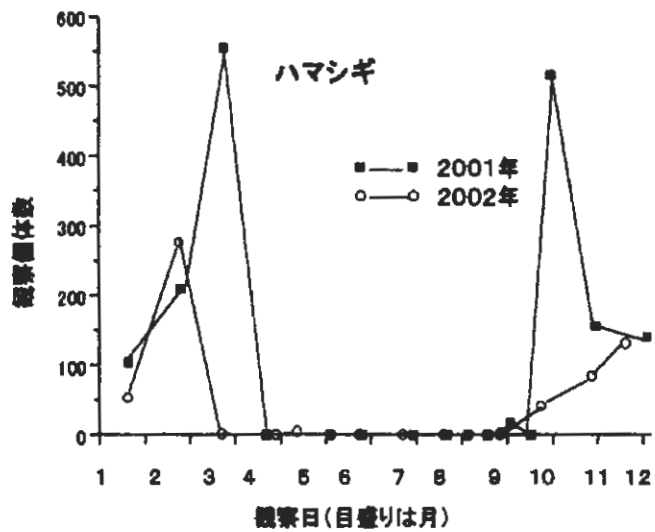
猛禽類の出現はあまり多くないが、今回のライン調査ではミサゴ(NT)がしばしば観察さ



れ、日常的な採餌場所になっていると思われる。三重県下では少ないトビも少数ながら観察された。またオオタカ(VU)、ハイイロチュウヒ等が時として観察された。ライン調査以外ではノスリ(2001.11.20) コミミズク(2001.10.20)が、またチョウゲンボウの越冬(2001~2002)も観察された(支部会員観察)。

環境保全対策への提言

海上の干潟は現状のまま保全すべきである。海に接する砂浜などもそのまま保全すべきであり、階段護岸などで、砂浜面積を減らすべきでない。陸地側の養魚池、水路、田等の湿地は満潮時におけるシギ・チドリの避難場所、採餌場所として特に重要であり、保全すべきである。これら陸地側の水辺も一部コンクリート護岸が施されたが、画一的な護岸でヨシや水辺の植生等野鳥の避難場所、採餌場所を減らすべきでなく、以前の状態に復帰すべきである。五主池および海上は狩猟が許されている。狩猟鳥以外の野鳥の誤射があつたを絶たない。海上も広く全面的に鳥獣保護区とすべきである。農耕地、休耕地などを借り上げ、一部を常時担水するなど、シギ・チドリを積極的に誘引する方策も検討すべきであろう。陸地側に積極的に湿地、水辺の植生を増やす施策を採るならばシギ・チドリの渡来数を維持あるいは増加することができるであろう。



今回の調査でも五主海岸周辺が全国的に見てもシギ・チドリの重要な中継地であることが明らかになった。地元自治体、および地元住民の理解を得て、後背地を含めて重要な湿地として保護すべきである。



2003年度(財)日本野鳥の会三重県支部総会

(支部総会の記事については編集部で作成しました)

2003年度日本野鳥の会三重県支部の総会が5月18日、13:30より、三重県総合文化センター内で開かれました。市川副支部長の司会で始まり、杉浦邦彦支部長の挨拶のあと、議長に近藤義孝理事、記録係に西口章一、村田芳雄理事を、議事録署名人に石原宏氏、橋本富三氏を指名しました。

引き続き、以下の項目について承認を受けました。

- 2002年度事業報告<保護部、研究部、企画部、編集部、事務局>
- 2002年度決算報告、監査報告 <事務局財務担当、監事>
- 2003年度～2004年度役員候補承認 <事務局>
- 2003年度活動方針案 <事務局>
- 2003年度事業計画案 <保護部、研究部、企画部、編集部>
- 2003年度予算案 <事務局財務担当>

閉会の後、親睦会がもたれ、多数の会員が参加しました。
各部の事業報告と計画案は以下の通りです。

事務局

2002年度事業報告

1. 総会を2002年4月21日(日)三重県生涯学習センター、大研修室で開いた。
2. 理事会を4回開いた。
 - 第1回 2002年4月21日(日)三重県生涯学習センター 大研修室
 - 第2回 7月28日(日)津市中央公民館 研修室C
 - 第3回 12月1日(日)三重県男女共同参画センター 和室
 - 第4回 2003年2月16日(日)三重県生涯学習センター 第1小研修室

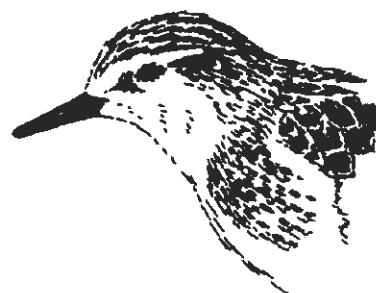
2003年度活動方針

- ① 次世代の担い手となる会員の拡大を図る。
- ② 環境保全・自然保護活動において、リーダーシップを発揮できる指導者や、様々なニーズに対応できる探鳥会案内人を育成する。
- ③ 会員相互の交流や、企画事業を促進し、魅力あふれる会づくりに努める。
- ④ 会の運営にあたり、状況に応じて組織のあり方を見直し、組織体制を強化する。
- ⑤ 環境保全・自然保護を進めるうえで、鳥類調査や環境に関する情報収集、研究を行なう。
- ⑥ 一般の人々に、野鳥のくらしや自然のしくみについて正しく理解し、環境保全について協力してもらえよう働きかける。
- ⑦ 自然と共存できる社会を構築するため、関係団体と連携し、環境保全・自然保護について関係機関へ提言を行なうなど積極的な行動を起こす。

保護部 (別項の保護部活動状況も参照下さい)

2002年度事業報告

1. シロチドリ繁殖保護 豊津浦海岸：杭を新調し、保護柵を1列立てた。吉崎海岸：看板のみ設置し、柵設置の許可を得た。
2. 木曾岬干拓地問題
 - 02年1月から愛知県側と合同で調査している。02年10月に愛知県野鳥保護連絡協議会との連名で、木曾岬干拓地鳥類調査中間報告を出した。03年2月のねぐら調査では、多数の猛禽類が確認された。
 - 2002木曾岬干拓フォーラムを11月10日長島町中央公民館で開催した。
3. 中勢地方オオタカ繁殖地溜池改修問題 (略：別項参照)
4. 北勢地方クマタカ繁殖地開発問題 (略：別項参照)
5. 上野市国有林猛禽類生息地域における粘土採掘問題
 - 02年8月 粘土採掘計画にあたって、環境省のマニュアル「猛禽類保護の進め方」にそって調査するよう林野庁に申し入れた。
 - 02年2月 申し入れたにもかかわらず、林野庁は調査を行わず、業者に採掘許可を出した。これについて、抗議文を提出し回答を求めた。





03年3月 支部からの要請により、本部より猛禽類保護調査について要望書が提出された。

2003年度事業計画

1. シロチドリ保護
シロチドリ繁殖調査を随時行なう。
2. 木曾岬干拓地問題
○ チュウヒ繁殖調査、猛禽類ねぐら調査を継続する。シンポジウム開催する。干拓地利用について支部内で討議し、提案をまとめる。
3. 中勢地方溜池改修問題 (略)
4. 北勢地方開発問題 (略)
5. 上野市国有林における粘土採掘問題: 調査を継続しながら、関係当局と交渉してゆく。
6. 野鳥密猟を根絶するため、アピール用としてパネルなどを作成する。
7. 愛玩飼養制度を全廃するための署名活動



編集部

2002年度事業報告

支部報「しろちどり」を4回発行した。

2003年度事業計画

1. 年4回の発行を予定する。
2. 支部活動のページ、会員のページ、探鳥会報告のページの他、特集に組んで編集したい。

企画部

2002年度活動報告

1. 探鳥会 (省略) (一般探鳥会については「しろちどり」の探鳥会報告をご覧ください)
○干潟を守る日イベント参加の探鳥会 4月 高松海岸、宮川河口
○会員限定探鳥会 5月 御池岳、曾爾高原
○身近な自然を体験する県民デー参加の探鳥会 11月 五十鈴川、県民の森、木曾岬干拓地
2. 野鳥講座: 4月21日(日) 総会終了後「密猟から野鳥たちを守ろう」参加者60人
3. 会員交流会: 8月4日(日) 松阪市サンライフ 参加者28人
4. 案内人研修会: 本部が企画する研修会に、2名が参加した。
5. 講師派遣 2件
1) 10月20日「たかまつひがたって知ってる?」 2) 12月21日 教養講座「子ども体験教室」

2003年度事業計画

1. 探鳥会
2. 交流会 総会終了後開催予定
3. 野鳥講座 8月に予定
4. 案内人研修会 2~3名派遣の予定。

研究部

2002年事業報告

1. カラス繁殖影響予備調査: 幹部のみ対象に実施した。(観察例報告4件)
2. シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査を行った。
3. 三重県の委託事業「平成14年度鳥獣保護区設定基礎調査」
調査地: 熊野市海岸部鳥獣保護区楯ヶ崎特別鳥獣保護地区 40ha
南島町鶴倉半島 行田・定山鳥獣保護区定ノ鼻・見江島特別鳥獣保護地区 70ha
調査地で、各2回調査を実施した。繁殖期と狩猟期に、鳥類はラインセンサスや定点観察、哺乳類はフィールドサインや聞き取りで調査しました。その結果と考察を報告書にまとめて、2003年3月に県へ提出しました。結果: 熊野市楯ヶ崎: メジロが多数生息しており、密猟行為があったので通報した。見江島: 集団繁殖地ということで調査したが、集団繁殖は認められず、冬期の越冬鳥類も特記すべきものはなかった。
4. 三重県の委託事業「平成14年度ガン・カモ類一斉調査委託」
三重県内指定調査地(166箇所)及びガン・カモ・ハクチョウ類の渡来するその他の箇所を



会員 38 名が、1 月中旬にカウント調査し、研究部で各県民局別に集計し報告した。

2003 年度事業計画

1. カラス繁殖影響調査：全会員に呼びかけて、調査に協力していただく。
2. シギ・チドリ類調査：昨年と同様に春期、秋期、及び冬期に実施する。
3. 三重県の委託事業：「平成 14 年度鳥獣保護区設定効果調査委託」と「平成 14 年度ガン・カモ類一斉調査委託」は、平成 15 年度も受託する方向で進める。

2003 年度第 1 回理事会

(文責：編集部)

2003 年度三重県支部総会に先立ち、5 月 18 日、第 1 回理事会が開催されました。

- 1) 2003 年度総会についての打ち合わせが行われました。
- 2) 理事会について： 理事会を年 2 回に減らし、理事会では予算・人事関係を決定し、その他の議題は部長会議等で図ることとし、部長会議を増やすことになりました。
- 3) 部長会議の旅費については 1 回の会議について 1000 円程度支給するように旅費規程を改定することが理事会で了解されました。
- 4) 事務局からの報告
本部が助成する「平成 15 年度支部事業補助金」に木曾岬干拓地フォーラム開催で申請し、交付が決定されました。

研究部からのお知らせ

レッドデータブック三重（仮称）の編集協力をします。

今年からレッドデータブック（RDB）を三重県が作ります。これまでは、三重自然史の会が作成しましたが、今回はより組織的に調査・検討を加え、県行政の手で創ることになりました。どんな RDB になるかまだまだそのイメージは未定です。県内のそれぞれの分野での生物研究家のみなさんがサポートして、そのイメージづくり、調査、検討を加え、完成をめざします。

そのため、元県博物館の清水善吉学芸員（昨年は松坂高校生物教諭）がこの仕事のために教育委員会より県職員へと人事異動するなど、人的な予算も確定し、本格的に取り組んでいくようです。

そこで、当然のことながらその鳥類部門を野鳥の会が分担することになりました。当面は研究部が中心になり、調査・検討を進めていきます。会員のみなさんにはこれからこのことに関わっているいろいろとお願いすることもあるかと思いますが、よろしくご理解ご協力をお願いします。

これまでの鳥類部会の進捗状況を少し紹介します。

1. 自然史の会が作成した「RDB 準備書」を検討し、絶滅状況にある種のカテゴリーを確定する。（たとえば、この鳥は絶滅危惧種に選定するのか、準絶滅危惧種にするのか等の科学的な検討を加える。その場合に三重県としての特徴をアピールできるようにする。・・・これがなかなか難しいのです。）
2. 1 のための基本調査を実施する。（すでに調査を依頼しました。・・・調査員さんよろしくお願いします。）
3. これまでの野鳥の会の機関誌（三重野鳥の会時代のものも含めて）探鳥会等での出現種の洗い出しをする。
4. なるべくカラーの写真付きで製本印刷したいので、積極的に、野鳥の生活を脅かさないように細心の注意を払いながら、生態写真を集める。

とりあえず、このようにスタートしました。これまで離島など調査が不足している場所に出向き総合調査もしなければならないと思います。会員のみなさんのご理解をお願いします。



保護部の近況と活動

1. 木曾岬干拓地問題

愛知野鳥保護連盟との共同のチュウヒ繁殖調査が精力的に続けられている。本年は巣材運び、餌渡しなどが観察され、干拓地内の3ヶ所で繁殖している模様です。

秋には木曾岬フォーラムを開催し、同干拓地におけるチュウヒ繁殖地、猛禽越冬地の保護を訴える予定です(11月23日、午後 長島町公民館を予定)。なお保護部の提示した干拓地利用案については「しろちどり」39号を参照してください。

2. 北勢地方クマタカ繁殖地開発問題。

地元自治体の要請を受けて、クマタカの繁殖調査が続けられている。現在までのところ今年の繁殖はみられていない。クマタカは隔年で繁殖する場合が多いので、今年は非繁殖年である可能性が高い。

3. 中勢地方オオタカ繁殖地ため池改修問題

観察が続けられ、7月末に1羽のヒナの巣立ちが確認された。工事担当者と緊密に話合いが行われ、繁殖を妨害しない工事計画がたてられている。

4. シロチドリ繁殖保護

4月に豊津浦に津地区会員により保護柵を設置した。本年は津市町屋浦から河芸町田中川河口までの間で、合計3羽のヒナの孵化が確認されたのみである。1996年、97年に20羽以上のヒナが確認されていたのを比較すると大幅に減少しており、このままでは繁殖個体群が絶滅するおそれもある。海岸を利用するつり客などは増加している。ただし、河芸町部分(豊津浦)は中別保樋門付近の1ヶ所を除き、ほぼ全面に渡って障害物が設けられ、自動車の乗り入れが阻止されており、今後繁殖が増える可能性もある。

吉崎海岸、雲出川河口、松阪伊勢方面、志摩半島方面での繁殖に関する情報は得られていない。

5. 渥美半島越戸大山ヘリコプター訓練基地建設問題

渥美半島中央部の越戸大山(おっとおおやま)の山頂付近に、陸上自衛隊がヘリコプター訓練基地を建設する計画があることが、判明した。越戸大山はサシバの渡りの際の重要なルートであると同時にオオタカの繁殖が確認され、また繁殖期に、サシバ、ハチクマも観察されている。同訓練基地の建設、利用が猛禽の繁殖、渡りに重大な影響をおよぼすことは明らかである。渥美自然の会からの要請により、三重県支部は6月9日に陸上自衛隊明野駐屯地へ訓練基地を建設しないよう申し入れた。

支部活動の記録 事務局まとめ

● 支部活動の記録(2003年4月～7月)

- 4/29 海山町島勝浦鳥獣保護区の期間更新にかかる意見書(他1通)を県へ提出した。
- 5/6 大山田村真泥池鳥獣保護区の期間更新にかかる意見書(他1通)を県へ提出した。
- 5/18 2003年度総会&親睦会・2003年度第1回理事会を開催した。
- 5/23 阿山町東部休猟区の指定にかかる意見書(他1通)を県へ提出した。
- 5/23 雲出川河口鳥獣保護区の期間更新にかかる意見書(他6通)を県へ提出した。
- 5/27 名張市滝之原・上小波田休猟区の設定にかかる意見書を名張市へ提出した。
- 6/5 支部報「しろちどり」第39号発行・発送作業(編集部・事務局)
- 6/9 陸上自衛隊明野駐屯地へ、渥美半島越戸大山(愛知県)にヘリコプター訓練基地を建設しないよう要請文を提出した。(保護部)
- 6/11 御浜町下市木鳥獣保護区更新にかかる意見書を県へ提出した。



- 6/11 大宮町七洞岳休猟区設定にかかる意見書を県へ提出した。
- 6/14～15 菰野町で、中部ブロック会議を開催した。
- 6/19 宮川親水公園銃猟禁止区域設定にかかる意見書（他3通）を県へ提出した。
- 6/26 事務局会議を行なった。
- 6/30 美杉村君ヶ野ダム鳥獣保護区の期間更新にかかる意見書（他6通）を県へ提出した。
- 7/12 中部ブロック会議について反省会を開いた。（北勢地区）
- 7/17 県と平成15年度鳥獣保護区設定基礎調査業務委託を契約した。
- 7/22 県と生物多様性調査「鳥類」調査業務委託を契約した。
- 7/22 鳥獣保護法に基づき、「平成15年から平成19年まで県内全域においてオスヤマドリ
の捕獲又は殺傷の禁止についての意見書」を県へ提出した。
鳥獣保護法に基づき、「平成16年から県内全域において4.5mm以下の散弾で鉛を含
むものの使用の禁止についての意見書」を県へ提出した。
- 7/25 鳥獣保護法に基づく対象狩猟鳥獣に係る禁止または制限に関する公聴会へ支部長が
出席した。
- 7/26 編集会議を開いた。（編集部）

● これからの活動（2003年8月～9月）

- 8/17 野鳥講座 部長会議
- 9 支部報「しろちどり」第40号発行・発送作業

探鳥会報告 2003年4月～5月

（紙面の都合で6月分は次号に掲載します）

● 篠田山探鳥会

2003年4月3日 9:30-12:00 松阪市久保町

篠田山

宮田たつ・谷口ひろ子 参加者：23名

カワウ、アオサギ、トビ、ハイタカ、サシバ、キジ、ケ
リ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、
モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、
ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、
イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハ
シブトガラス、28種

初心者向けと書いた方が参加しやすいと思う。
夕刊紙2紙の取材あり

● 干潟を守る日探鳥会（共催：高松干潟を守る
う会）

2003年4月20日 10:00-12:15 三重郡川越町
高松海岸

楢原 薬・高 和義 参加者：29名

カワウ、アオサギ、シロチドリ、ハマシギ、チュウシャク
シギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、キジバト、
ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ハシボソガラ
ス、14種

しろちどり40号

子供を対象にしたので底棲動物の観察に集中し
た。守ろう会の水谷氏は環境浄化には各種の生
物が存在しなければならないことを話した。

● 県民の森探鳥会

2003年4月26日 9:30-12:10 三重郡菰野町

千草県民の森

矢田栄史・高 和義 参加者：33名

サシバ、コジュケイ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、イワツバ
メ、ピンズイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、ツグミ、ウグ
イス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、
メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、スズメ
、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 24種、
未確認種タカ（sp）

枯れたアカマツが今年1月から3月にかけて大
量に伐採された。林に日射しが以前より入るよ
うになった。

● 青山愛宕神社探鳥会

2003年4月27日 10:00-12:00 名賀郡青山町

上津 愛宕神社

前澤昭彦・塗矢尋一 参加者：13名

コジュケイ、アオゲラ、アカゲラ、ミソサザイ、ヤブサ
メ、ウグイス、オオルリ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウ
カラ、イカル、カケス 12種



探鳥会報告

ミソサザイの卵が2個あった。これから温めるらしく、来年の探鳥会はヒナの孵る時期がよいと思った。

●櫛田川河口探鳥会

2003年4月27日 10:00-12:00 松阪市高須町
櫛田川河口

谷本勢津雄・中村洋子 参加者：16名

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、トビ、コチドリ、メダイチドリ、ケリ、アオアシシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、チュウシャクシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 36種

一週間前にはシギがまだ飛来せず、心配していたが、2、3日前に来ていた。キアシシギの左脚に青いラベルが付いていた。

●五十鈴川探鳥会

2003年4月27日 9:00-12:00 伊勢市宇治
今在家町

吉居瑞穂・山田昭子 参加者：18名

カワウ、サシバ、キジバト、アマツバメ、カワセミ、コゲラ、ツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ツグミ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 26種

やわらかな緑の上からオオルリの声が降ってくるが、姿がなかなか見えない。青空と新緑の中、鳥の声と姿をもとめ、楽しいハイキングでした。

●木曾岬干拓地探鳥会 (共催：愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年4月27日 9:00-12:00 木曾岬町木曾岬
干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者：14名

ハジロカイツブリ、カワウ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミサゴ、トビ、オオタカ、チュウヒ、キジ、バン、コチドリ、ケリ、クサシギ、イソシギ、チュウシャクシギ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ヒヨドリ、ツグミ、オオヨシキリ、セッカ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 38種

冬の猛禽も終わり、参加者も少なかったが、チュウシャクシギ、チュウヒ、オオタカ等を観察できた。

●イカルチドリを見る探鳥会

2003年5月4日 9:00-12:00 亀山市御幸町
亀山橋-忍山橋

楢原 薬・伊藤多紀子 参加者：11名

カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、ハイタカ、コジュケイ(声)、キジ、コチドリ、イカルチドリ、キアシシギ、イソシギ、タシギ、キジバト、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス(声)、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 30種、未確認種：チュジシギ?

ブルドーザーで砂洲を改変しているため、イカルチドリの営巣は発見できなかった。

●里山の鳥に出会う探鳥会

2003年5月5日 9:00-12:00 伊勢市矢持町
中村みつ子・(共催：愛知県野鳥保護連絡協議会)

山田昭子 参加者：20名

トビ、サシバ、アカショウビン、カワセミ、コゲラ、ツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、ヤブサメ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 19種

鳥だけでなく、へび、カエル、イモリなども観察でき、サシバを頂点とした里山の生態系の話が理解されたと思う。「へび、カエルがサシバのエサとは驚き」との参加者の声。

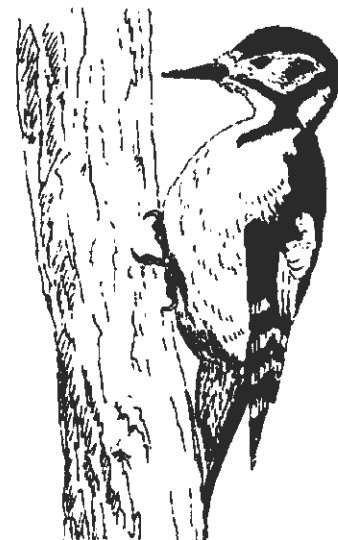
●御池岳探鳥会

2003年5月10日 8:00-14:30 三重県藤原町
及び滋賀県永源寺町御池岳

村田芳雄・近藤義孝 参加者：10名

トビ、アオバト、ジュウイチ、ツツドリ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ミソサザイ、コルリ、クロツグミ、ウグイス、オオルリ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、カケス、ハシブトガラス 18種

新緑の木陰の中ヒガラが手に取るような近くまで近づき、巣材を集めていた。アオ





バトの群が鳴き、クロツグミ、ジュウイチ、オオルリ、ミソサザイがさえずり、シマリスが岩の上でポーズをとってくれた。(シマリスはユーラシア大陸、北海道に棲息する動物で本州には棲息しない。ペットが放され、御池岳に定着している＝編集部)。

●鈴鹿川河口探鳥会

2003年5月11日 9:30-11:00 四日市市塩浜町磯津

高 和義・鹿島素子 参加者：4名
カワウ、ダイサギ、アオサギ、キョウジョシギ、キアシシギ、チュウシャクシギ、コアシサシ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セッカ、スズメ、ムクドリ 13種
雨天のためテグス回収をせず、探鳥会のみ実施

●市来川探鳥会 2003年5月11日 雨天中止

●木曾岬干拓地探鳥会 (共催：愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年5月25日 9:00-12:00 木曾岬町木曾岬干拓地／愛知県鍋田干拓地
近藤義孝 参加者：18名

カワウ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、ミサゴ、オオタカ、チュウヒ、キジ、コチドリ、ケリ、イソシギ、チュウシャクシギ、コアシサシ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、オオヨシキリ、セッカ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 31種

観察できる野鳥の種類の最も少ない時期で31種と少なかった。しかし、チュウヒが4羽を観察でき、雌雄の区別も確認できた。

●海蔵川探鳥会

2003年5月27日 10:00-12:00 四日市市西坂部町海蔵川

尾畑玲子・高 和義 参加者：5名

カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、アマサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、キジ、ケリ、キジバト、カワセミ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 24種

朝には雨が降り、開催が危ぶまれた。集合人数も少なかったが、遠くからの参加者もあり、決行。傘は殆ど不要であった。橋の工事で一番見どころの多い代官橋付近には野鳥があまり見られなかった。いつも見られるパンも不在。今日の主役はハシボソガラスとスズメの幼鳥でどちらもまだ親に餌をねだっていた。

編集後記

今回の「しろちどり」はタカの渡りを特集しました。このため、県内外の会員の方から貴重な記事をたくさん寄せていただきました。この特集をガイドブック代わりに青空にソアリングするサシバやハチクマを求めて、お気に入りの場所へ出かけてみませんか。編集部も伊良湖岬で初めてタカ柱を見たときはその雄大さに圧倒されたものです。

近年タカ類の繁殖地がどんどん失われています。タカの渡りが将来伝説になってしまわないように保護活動にも力を入れていきたいものです。

鷹ひとつ見つけてうれし伊良湖岬
芭蕉

追記：匿名で編集部へ原稿をおよせいただいた方、お手数ですが編集部 岡までご連絡をお願いします。

しろちどり 40号 2003年9月1日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 田中豊成

カット： 藤岡エリ子、小坂里香、
田中豊成、平井正志

編集： 平井正志 干

発行所： 日本野鳥の会三重県支部
杉浦邦彦方 〒516-0026
伊勢市宇治浦田2丁目9-4

印刷： 伊藤印刷株式会社
〒514-0027 津市大門32-13